

サロンにおける高齢者のつながりと支え合いの形成過程

—— A市B地区サロン参加者インタビューから ——

林 孝 之

サロンにおける高齢者のつながりと支え合いの形成過程

—A市B地区サロン参加者インタビューから—

Process of the Formation of Social Network and Support in Elderly People in Community Salon

—From A City B District Salon Participant Interview—

林 孝 之

1 高齢者の地域生活をめぐる問題と課題

経済の高度成長に伴う都市化の進展と、プライバシーを重視する価値観の広まりなどにより、地域のつながりが希薄化した。また、生活の利便性の向上により、人に頼らなくても衣・食・住を充足できるようになった。これらの傾向は、特に都市部において顕著に見られている。

しかし、つながりが希薄化し、支え合いが減少した現代の地域社会は、高齢者の孤立という重大な問題をひきおこしている。「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」(厚生労働省2008)は、地域には軽易な手助けの不足や制度の谷間にあるものへの対応、孤立死、消費者被害など、公的サービスでは対応できない生活課題があるという。それらの生活課題は、いずれも地域社会からの孤立を要因として含んでいる。

多くの高齢者にとって、孤立は直面する可能性の高い問題であると考えられる。「平成22年度版 高齢社会白書」は、孤立する高齢者の特徴として「一人暮らしや健康状態がよくない者、未婚や離別した者、暮らし向きの苦しい者」と説明する。現在は夫婦で生活し、

孤立しない生活を送る高齢者であっても、将来、伴侶が先立てば一人暮らしとなる。加齢に伴い健康状態が悪化する可能性がある。病気や介護で費用がかさみ、暮らし向きが悪化することがある。

高齢者の地域生活において、高齢者と地域住民とのつながりと支え合いの形成が求められている。

2 先行研究と本稿の目的

1) 高齢者のつながりと支え合いに関する先行研究

高齢者のつながりと支え合いについて研究する分野の一つに、老年社会学がある。この分野では、つながりを「ソーシャル・ネットワーク」、支え合いを「ソーシャル・サポート」してとらえ、それら2つの概念を「社会関係(個人と、彼または彼女を取り巻く他者たちとの関係)」と総称している。

近年、老年社会学は、高齢者と配偶者や子どもなどの家族・親族との関係だけではなく、友人や近隣住民などの非親族との社会関係についての研究がなされている。

高齢者と非親族との社会関係形成に関しては、知り合ったきっかけとなる社会活動と、

その後の社会関係の経過についての議論がある。古谷野（2009）は先行研究を整理し、大都市高齢者が他者と知り合うきっかけは「仕事」、「学校」、「趣味、地域活動」などであり「近隣で知り合った他者がほとんどいない」と指摘する。また、矢部ら（2002）は、大都市男性高齢者を対象にした調査結果から、「職場」で知り合い、共通する「趣味」で関係が継続されるなど、「関係の重複」が社会関係の形成に関連することを明らかにした。さらに古谷野ら（2005）は、大都市男性高齢者を対象にした調査結果から「関係の重複」が多い他者ほど、「情緒的な親密さを感じる」ことが多く、また家族ぐるみの付き合いをしたり、手段的サポートの提供者になることが多い傾向にあった」という。

つまり、都市部に居住する高齢者については、何らかの社会活動により他者と知り合うきっかけをもち、その後、出会ったきっかけとは別の関係が形成されるなど、関係が重複することにより、つながりが親密になり、支え合いも形成される、というのである。

しかしながら、なぜ高齢者は、何らかのきっかけにより社会関係を形成したにもかかわらず、出会ったきっかけとは別の関係を形成しようとしたのか、また、出会ったきっかけとは別の関係を形成し、その後のつながりと支え合いの形成過程は直線的なものなのか、など、先行研究では明らかにされていない部分が多い。

今後は具体的な社会活動に参加する高齢者を対象にした事例研究を実施し、つながりと支え合いの形成過程について明らかにする必要がある。

2) サロンへの注目と本稿の目的

先行研究によると、高齢者と地域住民とのつながりと支え合いの形成は、何らかの社会活動により他者と知り合うきっかけをもつことが重要であるとのことだった。

橋本ら（1997）は高齢者の社会活動を「仕事」、「社会的活動」、「学習的活動」と「個人的活動」の4つに分類する。「仕事」とは就労して収入を得る活動である。「社会的活動」とは地域行事や町内会活動、老人会活動、趣味の会の活動、ボランティアなどの活動である。「学習的活動」は老人学級やカルチャーセンターなどである。「個人的活動」は近所づきあい、買い物、友人宅訪問、旅行、スポーツなどの活動である。

これらのうち、高齢者と地域住民とのつながりと支え合いに関連する活動としては、地域住民が集う「社会的活動」が、よくあてはまると考えられる。

社会的活動のうちもっとも規模の大きい活動は町内会である。しかし、「平成19年度国民生活白書」（内閣府2007）によると、自治会加入率は30年前と変わらず高水準であるが、参加頻度は30年前と比べて大きく低下しているという。

本稿は、高齢者と地域住民のつながりと支え合いに関する社会活動として、サロンに注目した。坂本ら（2006）は「サロン」を「『人と人が自由に集まる場』を意味しており…デイサービスや老人クラブなど旧来高齢者の受け皿となってきた活動は、メンバーの登録制や役職の固定化など『組織的』で束縛感や不自由感があり、気軽な『仲間づくり』という感じではなかったことへの反省をふまえたものである」という。

つまり、サロンとは、地域において住民が自由に集まれる活動といえる。先の先行研究との関連でいえば、サロンとは、同じ地域に住むというきっかけにより、わずかながらも知り合う住民が集う、関係重複の機会、と説明できるだろう。

わが国では、「ふれあい・いきいきサロン」の名称で、近年、設置数が急速に増加しており、現在、全国に約3万箇所以上ある⁽¹⁾。

サロンの機能としては、近隣住民との「つ

ながりづくり」、孤独感解消等「心の健康維持」、サロン内での運動等「体の健康維持」、必要な情報を得る等「情報共有」がある（全社協2008）。

わが国におけるサロンは、1994年、高齢者と住民とのつながりづくりを目的に、全国社会福祉協議会が創設を提案した。その後、2000年の介護保険制度創設時、サロンはミニデイ等介護保険外サービス提供や介護予防活動として推進された。しかし2005年の介護保険制度改正後の、新予防給付創設や、介護予防における筋肉トレーニング重視傾向により、サロンは、本来の目的である住民との交流やつながりづくりへと回帰している状況である。

サロンに関する先行研究では、サロンにより高齢者と地域住民とのつながりを形成したとする報告がある（川口ら、2008）。また、サロン外において、見守り支え合う関係に発展する可能性があると示されている（高野ら、2007）。

しかし、サロンにも課題がある。坂本ら（2007）が山口県のサロンを対象に行った調査の結果、「担い手の発掘と確保」、「参加者の発掘と継続的な参加」、「活動内容・プログラムの充実」「地域住民との連携・協力的体制づくり」が課題になっているという。

それらのうち、高齢者と地域住民とのつながりと支え合いを考える上で、直接関連する項目である「参加者の発掘と継続的な参加」をみると、参加者の高齢化と固定化に伴う参加人数の減少、参加しない人への誘い、男性の参加促進などが具体的な内容となっているという（坂本ら、2007）。

そのため、高齢者がどのような経緯でサロンに参加し、サロンの中で定着して地域住民とのつながり、支え合いを形成するのかを明らかにする必要がある。しかしながら、高齢者がサロン参加に至る経緯や、その後の発展について言及する先行研究はほとんどない状況である。

本稿は、高齢者と地域住民のつながりと支え合いに関する社会活動として、サロンに注目し、高齢者の孤立が問題となっている地域のサロン参加者を事例に、サロン参加者がサロンに参加するきっかけと、その後の地域住民とのつながりと支え合いの形成過程を明らかにし、高齢者と地域住民のつながりと支え合いの形成について考察することを目的とする。

本稿で得られた結果は、高齢者の地域生活における課題を解決するための具体的な取り組みである、サロンの発展に寄与することができる。また、事例となった地域のサロンの取り組みを評価することができる。

3 研究対象と方法

1) 研究対象

本稿は、A市B地区において開催されているサロンに参加する高齢者を対象とした。B地区は、昭和40年代にA市により造成されたニュータウンである。おもに戸建住宅（25.6%）と市営住宅（68.2%）を中心とした集合住宅で構成される。

平成22年7月1日現在、人口17515人、世帯数8624世帯である。平成22年7月1日現在の、B地区の高齢化率は32.2%でA市内第3位となっている。B地区の構成要素別にみた高齢単身世帯の状況については、平成17年10月1日現在、戸建地区228世帯、集合住宅地区822世帯で、それぞれB地区の全高齢単身世帯数（1052世帯）の21.7%、78.1%と、集合住宅地区に高齢単身世帯が集中していることがうかがえる。近年、B地区では住民関係の希薄化が問題とされ、高齢者の孤立死が多発している。

B地区では、2008年2月よりサロンが開催されている。場所はB地区の中心にあるコミュニティセンターの一室である。

サロンの会場は、B地区住民の徒歩圏内に

位置する。地域住民が気軽に立ち寄れて、お茶を飲みながら会話や交流ができる場所で、世代を超えた交流や、地域のつながりと支え合いのきっかけになることをめざしている。B地区のサロン参加者は、互いに徒歩圏内に居住する、B地区の地域住民で構成されると考えられる。

サロンは、月1回土曜日、午前10時から午後3時まで開催されている。参加費は200円で、お茶（コーヒー、紅茶、お茶など）とお菓子が用意される。

B地区自治会、B地区民生委員、B地区社会福祉協議会、B地区ボランティア団体、A市のまちづくり関連部局で構成する「B地区まちづくり会議」が運営主体である。毎回、「B地区まちづくり会議」のメンバー6名から7名ほどのスタッフかサロンに常駐する。スタッフは、受付、参加費の受け取り、お茶やお菓子の供与のほか、参加者相互の交流を促し、楽しい時間を過ごすことができるように、麻雀や会話の相手、新規参加者の紹介もする。

2009年4月から2010年3月までの延べ参加者数は462人、1回当たり平均38.5人が参加している。年齢制限を設けていないものの、参加者はみな高齢者で、半数以上が女性である。ほとんどの参加者が10時に集まり、昼頃までおしゃべりや、麻雀などの趣味活動を楽しむ。昼頃になると、持参した軽食を食べる。14時頃より帰宅を開始し、15時には全員帰宅する。

2) 研究方法

本稿は、B地区に居住する高齢者がサロンに参加するきっかけと、その後のつながりと支え合いの形成過程を明らかにするために、サロン参加者にインタビューしその内容を分析するという、質的研究を採用した。

「質的研究」とは一般に「社会現象（人間関係や行動など）を、それにかかわっている

人たちの認識をもとにして解明しようとする」研究であるといわれている（Popeら、= 2001）。具体的には、インタビューや観察などにより得られた質的な情報を分析する研究方法である。

本稿が質的研究を採用した理由は、高齢者がサロン参加に至る過程や、その後の発展過程を探るためには、参加要因、その後のつながりと支え合いの相関を量的に分析する方法もあるが、それらの過程を詳細に分析するためには、参加者の語りを質的に分析することが適していると判断したためである。

最初にインタビュー調査を行ったのは2010年5月8日である。筆者はサロンに参加し、参加者と一緒にお茶をいただきながら、A氏から話を伺った（表1）。その内容を読み込むうちに、つながりと支え合いの過程は、「つながるようになった」、「支えられるようになった」と直接語られるのではなく、A氏の話の文脈から理解されるものであることがわかった。そのため、分析にあたっては、KJ法（川喜田1967）のように、語りの内容を個別の情報に分解して、類似する情報を統合するのではなく、語りの内容から、つながりや支え合いの形成過程と思われる部分を読み取り、その意味内容ごとに分類する必要があると考えた。

そこで本稿は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に分析することとした。

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、木下（2003）により提唱されている質的調査法の一つで、「データに密着した（grounded on data）分析から独自の理論を生成する研究法」である「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を、より研究者が実践しやすい形に修正した手法である。いいかえれば、インタビュー等で得られた語りを、一字一句分解せずに、語り全体の流れから人の行動や、人と人とのやりとりを読み取り、

表1 調査協力者の属性

	氏名	性別	年齢	家族形態	居住年数	サロン参加回数
1	A氏	男性	70代後半	夫婦	6～10年	10回以上
2	B氏	女性	70代前半	夫婦	10年以上	5回未満
3	C氏	女性	60代後半	夫婦	6～10年	10回以上
4	D氏	女性	80代前半	ひとり暮らし	10年以上	10回以上
5	E氏	女性	70代前半	夫婦	10年以上	10回以上
6	F氏	女性	70代前半	夫婦	10年以上	10回以上
7	G氏	女性	60代後半	同居	10年以上	10回未満
8	H氏	女性	70代後半	ひとり暮らし	10年以上	10回以上
9	I氏	女性	70代後半	夫婦	10年以上	10回以上
10	J氏	女性	70代前半	夫婦	10年以上	10回以上
11	K氏	女性	70代後半	夫婦	10年以上	10回以上
12	L氏	男性	70代前半	ひとり暮らし	10年以上	10回以上

その変化、動きを図示して考察するものである。

木下（2003：89-91）によれば、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは、「人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究であること」、「ヒューマンサービス領域であること」、「研究対象がプロセス的性格を持っていること」が採用要件となるという。本稿の研究内容は、それらのいずれにも当てはまると考えられる。

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにおいては、無作為に対象者を選定するのではなく、データの内容を読み込み、解釈した上で、そのデータと類似する、または対比するデータを収集するという理論的サンプリング（木下2003：113-130）により対象者が選定される。

筆者はサロンに参加し、サロンと地域におけるつながり、支え合いについて、A氏の話をつと。A氏の了解を得て、話の内容はメモをつと、録音した。

後日、筆者はA氏のメモと逐語録を読み込み、意味内容ごとに分類し、その内容を説明する概念名をつけた。そして、メモや逐語録に戻り、その概念に類似、対極する概念がないかを点検した。そして、「サロン参加の契機とサロン参加後のつながりと支え合いの深化・発展」という分析課題を設定した。

以後、筆者はサロンに参加し、参加者と一緒にお茶を飲み交流しながら、A氏の話と類似または対比する話をつとる参加者を見つて、メモと録音の許可を得て話を伺った。A氏と同様に概念を作成し、サロンに戻り話を収集するという方法で対象者を選定した。

インタビュー方法は、A氏と同様にサロン内、またはサロン終了後自宅にお伺いして、個人と、またはグループと面接した。インタビューにおける質問項目は「サロン参加前のきっかけ」、「サロン参加後のつながりと支え合いについて」の2つとし、反構造化面接により自由に語っていただいた。面接時間は、約30分から90分であった。はじめに実施したA氏の面接から、最後のL氏の面接までの期間は、2010年5月8日から7月10日までであり、合計12人の語りを分析した（表1）。

生成された概念の妥当性を確保するために、所属する福祉系大学院のゼミナールで指導教授と博士課程、修士課程の院生に報告し、概念の内容や表現の修正を図った。そして、概念図の作成および考察を行った。

3) 倫理的配慮

インタビュー対象者に文書で研究の趣旨と方法を説明し、同意を得た上で実施した。

得られたメモや逐語録から、意味内容が変わらない範囲で、個人を特定することができ

るとされる固有名詞を削除、改変した。分析終了後、研究上の手順について査読を受け、活字化された段階で、メモと録音内容はすべて破棄することとしている。

4 結果と考察

分析の結果、4つのカテゴリー、18の概念が抽出された(資料1)。また、それらの概念間の関係は、図1のようになった。以下、抽出されたカテゴリーを【 】、概念を『 』、語りを“ ”で示しながら、分析結果について述べる。

1) 【参加前の社会関係の存在】

話を伺ったサロン参加者には、サロンに参加する以前から他者との社会関係があった。いかえれば、他者とのつながりがない方はいなかった。

サロン参加以前の社会関係には『民生委員とのかかわり』、『老人クラブつながり』、『ご近所つながり』の3つがあった。

『民生委員とのかかわり』は、担当高齢者の見守りや相談などといった、民生委員の職務を通じたかかわりである。

『老人クラブつながり』は、老人クラブを通じた仲間関係をもとにした関係である。

『ご近所つながり』は、近隣に住んでいるという理由により形成された関係である。

また、参加以前から、参加者相互の具体的な支え合いと、具体的な支え合いまでは至っていないものの、そのもととなる感情があることがうかがえた。

前者は“…いつも電話をくれて、大丈夫かいとってくれた”など、情緒的な支援、“何かあったらいつでもくださいね”など、手段的な支援を、それぞれ期待させる語りがみられた。

後者は、「情緒的一体感」と呼ばれる感情である。これは浅川ら(1999)の概念であり、

「一緒にいてほっとする」などの一体感と、「一緒によくおしゃべりをする」などの同伴行動から構成され、情緒的、手段的サポートなどの、支え合いのもととなる概念といわれている。

つまり、サロン参加者は、全くつながりも支え合いもなかったわけではなく、サロンに参加する前から、民生委員、老人クラブ、近隣との間に、支え合いに至る可能性のある感情や、具体的な支え合いがあったのである。

2) 【社会関係維持の危機】

話を伺ったサロン参加者は、社会関係が維持できなくなる、または将来そうになってしまうのはいかと、想像させるような状況を体験していた。そうした状況として、以下の3つがあった。

『なじみの老人クラブ喪失』は、定期的に出会い、関係を維持するための機会を直接的に失った状況である。

『身体機能変化』は、直接、社会関係維持の機会を失ったわけではないが、病気などにより身体機能に不調が発生したことにより、将来、外出し人と会ったりすることができなくなるのではないかと、感じることである。

『立ちほだかる団地砂漠』は、『身体機能変化』と同様に、団地内のつながりの少なさを目の当たりにし、将来的には自分も、つながりのない中で暮さなければならないのではないかと、感じることである。

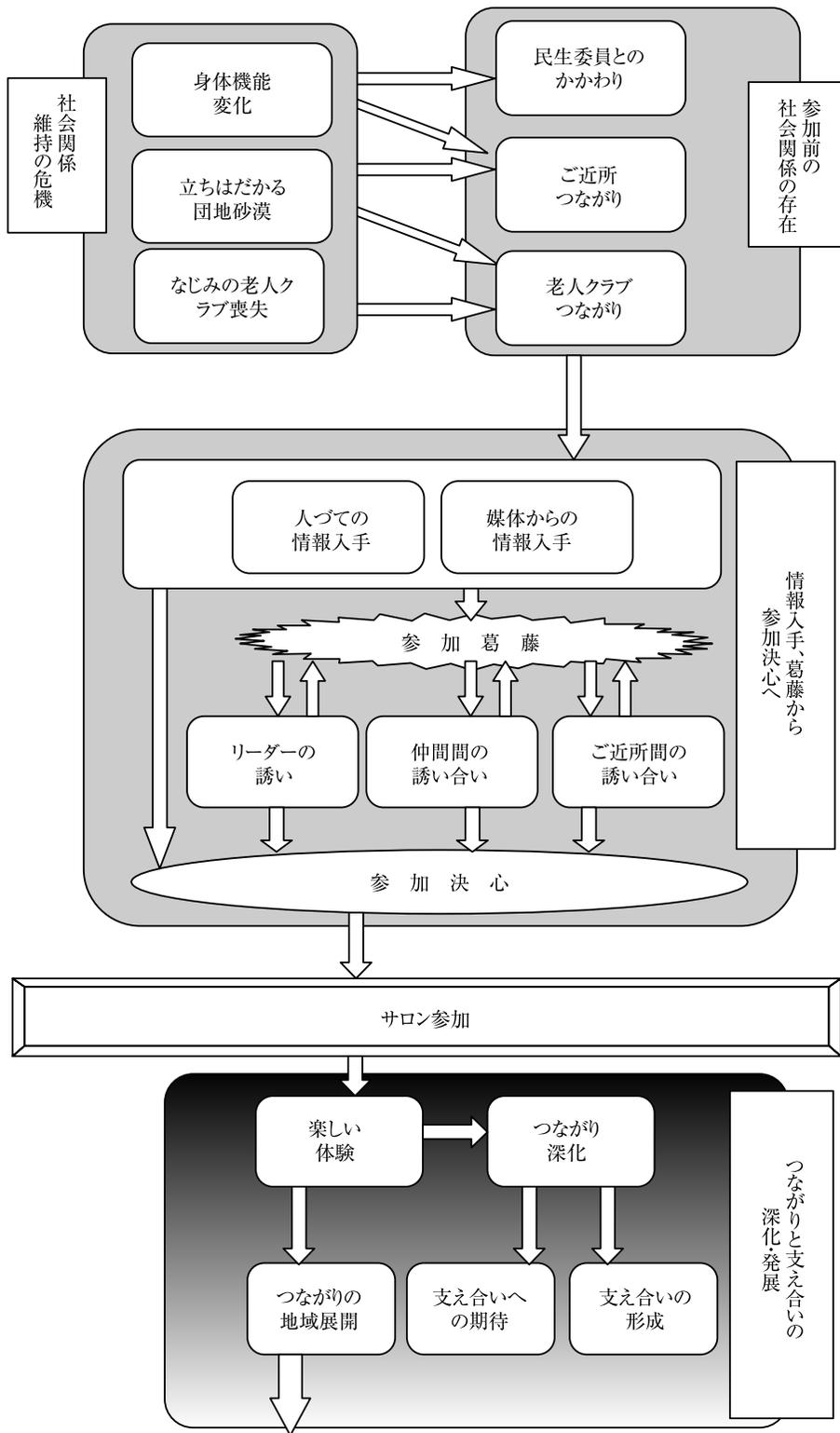
つまり、サロン参加者は、サロンに参加する前から、民生委員、老人クラブ、近隣との間に社会関係があったものの、それらの関係維持が危機的状況だったのである。

3) 【情報入手、葛藤から参加決心へ】

話を伺ったサロン参加者は、人を介して、広報やポスター、回覧板などの媒体、または直接目で見てサロンに関する情報を得ていた。

ここでいう情報とは、「福祉情報」である

図1 サロン参加者のつながり・支え合い形成過程



【参加前の社会関係の存在】へつながる

筆者作成

と考えられる。森本（1996：37-9）は「福祉情報」を「住民や福祉サービスの利用者自体に関することがら、福祉にかかわる施策やサービスあるいは施設やマンパワー自体に関することがらおよびそれらの両者の状況関係に関することがらについての“報せ”であり、社会福祉に関して、判断を下したり、行動を起こしたりするための知識」と定義する。

サロン参加者は、サロンの開催やその内容についての情報を得て、参加を決心した（『参加決心』）。

しかし、回覧や口コミだけで直線的にサロンに来た方がいる一方で、情報が得られても、サロンの参加をためらう方もいた。その理由として、知り合いがいないところで過ごすことができるのか、楽しいか、会場までたどり着けるのか、などという心配があったことがあげられる。

サロンの参加をためらう方を『参加決心』へと導いたものは、誘いだった。本稿はそれを、『リーダーの誘い』、『仲間間の誘い合い』、『ご近所間の誘い合い』に分類した。

『リーダーの誘い』とは「仲間の中でもリーダー格の人物から、サロンに参加するよう誘われること」である。

『仲間間の誘い合い』とは「サロンとは別の組織の仲間が、サロンへの同伴参加を勧めること」である。ここでいう「組織」とは、サロン参加前にあった老人クラブのことである。

『ご近所間の誘い合い』とは、「地域の中の親しい住民から、サロンに参加するよう誘われること」である。

参加をためらう方は、信頼できるリーダーや仲間、親しい近隣住民の誘いにより『参加決心』に至った。しかし、すべての参加者が誘いから即、参加を決心するに至ったわけではなかった。誘いを受けたものの、参加できるのか、楽しめるのかという「ためらい」と「決心」の間を行きつ戻りつし、最終的には

仲間や住民、リーダーを信頼し『参加決心』に至った。

4) 【つながりと支え合いの深化・発展】

サロン参加者は、他の参加者とのおしゃべりや、麻雀などの趣味活動を通じて、サロンを楽しんでいると感じていた（『楽しい体験』）。おしゃべりの相手は、参加以前からの組織の仲間だけではなく、新たに出会った人も含まれていた。新たな出会いは、「1回きり」の出会いになる場合と、何回も会い、『楽しい体験』を共有する場合に分かれた。

参加者は、『楽しい体験』を重ねるうち、これまでのつながりや、新たなつながりを深めた（『つながり深化』）。具体的には、互いの体調を心配する、近所の“お風呂（銭湯）”に誘い合う、などの語りから見られた。

『つながりの深化』から、『支え合いの形成』、『支え合いの期待』という、2つの支え合いが形成された。その内容としては、体の具合が悪いときに、そのことをうちあけるなどの情緒的な支援や、“ご飯を作ってあげる”などの手段的な支援もあった。

具体的に支援の授受があったわけではないが、将来必要ときに、支え合いとなるだろうと期待していたと思われる。

また、『楽しい体験』により、地域住民をサロンに誘うという語りもあった。本稿はこれを『つながりの地域展開』と名づけた。

『つながりの地域展開』は、具体的な誘いに結びついている、または、誘おうかどうか迷っているという、2つの状況が語られていた。しかし、サロンのつながりが、地域に向けて広がっているという点において共通する。

『楽しい体験』は、サロンの外にもつながりを拡大していたのである。

5 総括

本稿は、高齢者の孤立が問題となっている

B地区を事例に、高齢者がB地域のサロンに参加するきっかけと、その後の高齢者のつながりと支え合いの形成過程を明らかにし、高齢者のつながりと支え合いの形成について考察することを目的としていた。

結果、サロン参加者は、参加以前から老人クラブや近所付き合いなどの社会関係を持つものの、それらの関係を維持することに困難を感じていた。そうした状況を背景に、サロンに関する情報を得て直接、または誘いをきっかけとして参加に至った。そして、サロンにおいて楽しい時間を過ごすことで、つながりと支え合いを深めるとともに、新たなつながりの形成に発展している状況が明らかになった。

すなわち、B地区のサロンは、すでに地域において関係を形成している高齢者の、関係重複の機会であるといえる。そして、B地区のサロンが、高齢者のつながりと支え合いの形成に貢献している、ということであれば、今回の調査結果は先行研究を支持するものであり、B地区の高齢者のつながりと支え合いの形成に関し、有効な実践であると評価できる。

今後、B地区において高齢者のつながりと支え合いの形成をめざすならば、単にサロンを増やす、ということではなく、住民に自治会や老人クラブへの活動を推奨するなど、サロン参加以前からの、住民相互の出会いづくりが課題となる。

近年の地域福祉実践においてサロンは、市町村社会福祉協議会が中心となって推進されている。しかし、自治会や老人クラブ活動の活性化については、あまり着手されていないように見える。B地区の課題は、わが国の地域福祉実践においても共通する課題ではなからうか。

またB地区においては、つながりを維持することに対する啓発も必要である。特に、心身機能の低下による社会関係の減少や、地域

全体に広まるつながりの希薄化といったことに気づかずに生活している高齢者や、気づいていても新たな社会関係の形成をあきらめてしまう高齢者もいる。つながりや支え合いづくりに関する講演会や学習会を地域で開催してはどうだろうか。

サロンに関する情報提供も重要である。B地区のサロンにならない、他の地域のサロンにおいても、回覧、ポスターや口コミだけではなく、外からサロンの様子が見えるようにする、大きな看板を出すなどして、直接目でみることができるような工夫も有効である。

サロン参加に関しては、誘いが重要である。仲間や近隣相互の誘いを推奨したい。ただし、仲間や親しい近隣の誘いは、仲間や親しい近隣間のつながりや支え合いを形成するが、その範囲は、「仲間」、「親しい近隣」それぞれの社会関係に固定化されてしまうという問題もある。サロンの問題として先行研究で示されている「参加者の高齢化、固定化」という問題に対し、本稿は誘う人の社会関係が限定されているがゆえに起こる問題ではないか、と説明できる。

そのため、仲間や近隣相互の誘いを積極的に奨励しながら、社会関係の希薄な住民に対する誘いも重要である。

本稿の調査では、地域のリーダー格の活躍がみられた。自治会役員や民生委員、老人クラブ役員、サロン運営委員や、行政職員、地元で支援活動をするNPOや保健医療福祉専門職なども、誘いに参加することが求められる。

最後に、参加者が楽しいと感じることができるとサロン運営が必要である。サロンの運営にあたる「B地区まちづくり部会」の役員は、新規参加者がおしゃべりの輪に入れるように援助したり、体調不良の参加者を気づかったり、麻雀の相手をしたり、手作りの漬物を提供したり、敬老の日やクリスマスには手作りのお菓子をふるまっていた。筆者自身、調査

を通じて「B地区まちづくり部会」役員の心温まる活動にふれ、心底、サロンは楽しいと感じた。

しかしながら先行研究では、そうした担い手の不足が指摘されていた。B地区においても、「B地区まちづくり部会」後任役員の発掘は課題となっている。参加者が楽しめるサロン運営を目指すために、担い手の発掘や養成に関する研究や実践にも着手する必要がある。

6 本稿の限界と課題

本研究が得た結果は限定的なものである。B地区と同様に高齢者の孤立を問題とする地域のサロン参加者との比較研究を実施する必要がある。

本研究はサロン参加以前に、地域における何らかのつながりがあったメンバー間の語りを用いた分析にとどまった。サロン参加以前に、地域におけるつながりのないメンバー間のつながりと支え合いの形成過程についても明らかにする必要がある。

また、つながりが深まった後、その関係が支え合いに至るプロセスについての十分な語りを得ることができなかった。B地区サロンの再調査を企画し、データを収集し分析してみたい。

謝辞

B地区サロン役員の皆様、調査協力者の皆様は、B地区のつながり、支え合いづくりに役立つならばと、サロンに受け入れ、本研究に快く協力していただきました。心よりお礼申し上げます。

また、北星学園大学大学院の杉岡教授、大学院博士課程、修士課程の院生の皆様、概念生成において貴重なアドバイスをいただきました。心よりお礼申し上げます。

註

- (1) 全国社会福祉協議会(2008)によると、高齢者を対象とした「ふれあい・いきいきサロン」は、1997年の3,159箇所から、2005年には32,522箇所と、8年間で10倍に増加していると指摘する。

引用・参考文献

- 浅川達人、古谷野亘、安藤孝敏、他(1999)「高齢者の社会関係の構造と量」『老年社会科学』21(3)、329-338。
- 橋本修二、青木利恵、玉腰暁子、柴崎智美、永井正規、川上憲人、五十里明、尾島俊之、大野良之(1997)「高齢者における社会活動状況の指標の開発」『日本公衆衛生雑誌』44(10)、760-768。
- 厚生労働省(2008)『地域における「新たな支え合い」を求めて：住民と行政の協働による新しい福祉：これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告』(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7.html>, 2009.8.1)。
- 古谷野亘(2009)「高齢期の社会関係：日本の高齢者についての最近の研究」『聖学院大学論叢』21(3)、191-200。
- 高野和良、坂本俊彦、大倉福恵(2007)「高齢者の社会参加と住民組織：ふれあい・いきいきサロン活動に注目して」『山口県立大学大学院論集』8、129-137。
- 川口一美ら(2008)「現代の高齢者と地域のサロナーサロンの持つ意味と今後の課題」『聖徳大学研究紀要』19、17-24。
- 川喜田二郎(1967)「発想法」中央公論社。
- 木下康仁(2003)「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践」弘文堂。
- 森本佳樹(1996)「地域福祉情報論序説—「情報化福祉」の展開と方策」川島書店。
- 内閣府(2008)「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h20/sougou/gaiyo/index.html>)。
- 内閣府(2007)「平成19年度版 国民生活白書」(http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/01_honpen/index.html)。
- 中村久美(2009)「地域コミュニティとしての「ふれあい・いきいきサロン」の評価」『日本家政学会誌』60(1)、25-37。
- 岡村重夫(1974)「地域福祉論」光生館。
- 大橋謙策(2006)「福祉コミュニティづくり」：日本地域福祉学会編『新版 地域福祉事典』中央法

規、24-25。

Pope, C., Mays, N., (2000) "Qualitative Research in Health Care (2nd edition)" BMJ Publishing Group (=2001、大滝純司監訳『質的研究実践ガイド 保健・医療サービス向上のために』医学書院。)

坂本俊彦、高野和良ら (2007) 「ふれあい・いきいきサロン活動の評価研究 第2年度報告書【分析編】」平成18年度ニッセイ財団高齢社会助成「実践的研究助成」。

全社協 (2008) 「「ふれあい・いきいきサロン」のてびき」全国社会福祉協議会。

資料1 カテゴリー、概念、語りの具体例

*カテゴリーを【 】、概念を『 』、語りを“ ”で示す。

1) 【参加前の社会関係の存在】

概念 『民生委員とのかかわり』

定義 「民生委員の訪問や安否確認を受けるなどの関係があること。」

語り L “民生委員が時々来てくれている。自分は元気だから…と思ったけれど、来てくれれば安心だ。”

概念 『老人クラブつながり』

定義 「参加者の間に、老人クラブでつくられた関係があること」

語り A “みんなももとは老人クラブの仲間だった。”

C “ここに来る前も、Eさんは老人クラブだったから、たまにあっていた。”

D “私もそうだけど、ここに来る人は老人クラブだった人が多いよ。”

E “おふる行かないかいとか、(老人クラブの) みんなを誘っていた”

F “Iさん(老人クラブの仲間)は、いつも電話をくれて、大丈夫かいとってくれた。”

概念 『ご近所つながり』

定義 「近所の人との関係があること」

語り B “互いに若い頃から20年来交流があり、外で会うと声をかけあう奥さんがいる。一緒に買物したり、家にあがってお茶を飲んだりしていた。”

J “Kさんとは、近所であいさつがきっかけで知り合って、知らないことがあったら教えてくださいとか、声をかけてた。”

K “近所であいさつされても、この人と付き合っても大丈夫かな、っていつも考えているんだけど、Jさんは、あいさつだけでなく、「何かあったら教えてくださいね」と、さりげないひとことがあって、この人なら大丈夫と思った。”

2) 【社会関係維持の危機】

概念 『なじみの老人クラブ喪失』

定義 「地域の仲間との関係を維持する場で

ある、老人クラブがなくなること」

語り A “みんなももとは老人クラブの仲間だったの。老人クラブが維持できなくなって、解散しちゃったのさ、それで、寂しいから週1回集まろうかって話をしていた。”

C “残念なんだけど、役員いなくなっちゃったのよね。それで老人クラブ、やめちゃったの。”

概念 『身体機能変化』

定義 「身体機能が健康状態から変化すること」

語り K “昔は元気に働いていたけれど、足が悪くなってからは、病院に行くのも大変になった。”

L “大きな病気をしてね、あの時は大変だった、ああ年なんだなって思ったね。”

概念 『立ちほだかる団地砂漠』

定義 「つながりや支え合いのない地域社会の実態を目の当たりにすること」

語り A “ここは…団地砂漠だな。若い人も、誰でも、おはようの声もない。みんながみんな、つながっていない。”

B “近所の人とはあまり顔を合わさない。”

E “昔は子供がつながるきっかけだったけど、今は子供がいないから、つながる機会がない。”

E “掃除に出たときに近所の人と話すようにはしているけれど、プライバシーがあるから、深くまで聞けない。”

3) 【情報入手、葛藤から参加決心へ】

概念 『人づての情報入手』

定義 「人を介してサロンの情報を手に入れること」

語り A “Iさんが、こういうの(サロンC)あるよって…”

K “Jから、近くでやるよ、歩いていけるよ、と。”

L “私を担当してくれている民生委員の方がね、今度、サロンができませんよといわれました。”

概念 『人づて以外の情報入手』

定義 「回覧やポスターなどの媒体を通じて、または直接目でみるなど、人づて以外でサロンの情報を手に入れること」

語り A “市の広報を見て、お茶を飲んでおしゃべりするところなんだと思っていた。”

B “広報を見て、ちょっと行ってお茶飲めるところなんだということは知っていた。”

C “ここ（サロン）のことが回覧に入ってたね。”

D “回覧まわってたね。”

I “サロンができると回覧で見て…”

J “集会所のポスターを見て、お茶を飲むところか—と思って。”

K “サロンのことは人から聞いたりしていたけれど、サロンがどんなところか、実際に行って（窓から）のぞいた。”

概念 『参加葛藤』

定義 「サロンの参加をためらうこと」

語り B “一人だと不安だった。”

J “お茶か…お茶だけだとつままないかな…どうしようかな…”

K “知らないところに、ふっと入れない。誰かに声をかけてもらわないと。”

K “足が悪いから、歩いていけるかな…と思っていた。”

L “将棋は好きだけど、毎日とか、週1回とかにやるのは、結構つかれる。あんまり夢中になるものちょっとね。”

概念 『仲間間の誘い合い』

定義 「サロンとは別の組織の仲間が、サロンへの同伴参加を勧めること」

語り C “老人クラブの仲間から、どうですか—と誘われた。”

E “（老人クラブの仲間には）来れるときにおいで、来たら楽しいよ、私も来ているからね、とっている。”

F “（老人クラブの仲間）行って見ようよと誘われて…”

H “みんな（老人クラブの仲間）から誘われた。”

概念 『リーダーの誘い』

定義 「仲間の中でもリーダー格の人物から、

サロンに参加するよう誘われること」

語り A “もとあった老人クラブのIさんが、その老人クラブの役員をしていて、みんなに電話して、一緒に行こうよと誘ってくれた。”

D “Iさん（老人クラブの仲間）が、こういうのあるから、どう？って誘ってくれた。”

概念 『ご近所間の誘い合い』

定義 「地域の中の親しい住民から、サロンに参加するよう誘われること」

語り K “Jから、月1回だから、行ってみようよ、大丈夫だよといわれた。”

概念 『参加決心』

定義 「サロンへの参加を心にきめること」

語り A “人の悪口を言わない信頼できる人から言われたら、行って見ようかなと思う。”

B “仲のいい近所の人が行こうと言ってくれて、それなら…と思い行くことにした。”

C “Iさんは面倒見がいい。Iさんが誘ってくれたから誰でも行く。”

D “回覧が回っても行く気になれない。誘われたから来たという感じ。無理やりではなく、「行けそう？」という感じで…”

F “だまって家にいても疲れるし、一人でお店に行ってもつまらないし、Gさんが行くというから、行こうと思った。”

H “人の話を聞いているだけでもいいよといわれた。”

I “老人クラブがなかったし、サロンだったらみんなが集まれるから、みんなの行く機会になるからいいなと思って…”

J “ポスターを見て、お茶を飲むところか、いいな—、お茶だけじゃつままないかな…でも退屈だし、みんな誘って行って見ようよと…”

K “ゆっくり歩いておいでと言われ、歩けないわけではないし、他に行くところはないし、この人が言うなら大丈夫かな…と思って…”

L “将棋が決め手でした。（真剣にやる

と) けっこう (将棋は) 疲れますから、週1回は費やしたくないし、毎日将棋というのもちょっと…他のこともやりたい。でも、月1回のペースで将棋ができるなら、楽しみになる。”

4) 【つながりと支え合いの深化・発展】

概念 『楽しい体験』

定義 「サロンの中で趣味や娯楽、交流などを通じて、楽しいと感ずること」

語り B “やっぱり人と話すのはいいーと思った。カレンダーに丸をつけて、月1回を楽しみにしている。”

C “介護しててね…ここに来るようになって、ここで人と会って、いろんな話を聞くと面白いね。”

D “ここに来ると仲間に会える。”

G “楽しい。2回あってもいい、学校を開放して、毎日あってもいい。”

H “人の話を黙って聞いていると楽しいね。”

I “私もここで楽しませてもらっている。”

J “お父さんや孫たちといるもの楽しいけれど、これ (サロン) が唯一つの外に出ることになっているから、本当に楽しみ。”

L “やっぱり将棋は楽しいよ。”

概念 『つながり深化』

定義 「サロンでの交流により、これまでのつながりや新たなつながりを深めること」

語り B “はじめは知らない人ばかりで…まだそんなに来ていないけれど顔見知りも増えた。”

C “病気になって休んだら、どうしているのかなって思うよ、心配になるよね。”

D “ここで、おしゃべりしているうちに「今度温泉いこうか」と広がっている。”

E “今度お風呂行かないかい、と誘い合って行く。”

G “顔だけ知っている近所の人でも、ここで話すとおあんな人なんだ、とわかる。そこから親しくなれる。”

概念 『支え合いの形成』

定義 「サロンでの交流により、参加者が具体的な支援を得たり、提供したりすること」

語り A “(休んでいる参加者、入院している参加者の) お見舞いにも行くしね”

D “体の具合が悪いときに、ここだと話すことかできる。”

E “具合が悪いというときには、ご飯を作ってあげたりする。”

I “顔を見ない時は、どうしているのかなと思って、電話する。”

概念 『支え合いへの期待』

定義 「具体的な支え合いに至っていないが、必要なときに得られるであろう、支援しようと予測できること」

語り C “ここには家で介護している人、他にもいるからさ。(介護のことで) 困ったら、いろいろ助けてもらえるなって思っている。”

I “来なかったら、どうしているのかな、大丈夫かな、帰りに寄ってみようかなって思うよ。”

L “今のところ、(サロンにおける) 支え合い、まではっていない。でも可能性はあると思う。この前サロンを休んだが、行かないとみんな心配しているみたいで、別なところで (サロンの) 知り合いにお会いして、心配したわよといわれて。今後、サロンのつながりが役に立つかもしれない。”

概念 『つながりの地域展開』

定義 「サロン参加者が地域の未参加の住民を誘うこと」

語り A “新規にね、誘ってもね、会話できないのさ、行こうって誘っても来ない人がたくさんいる。”

C “近所の人を誘ってるんだけどね、来ない人は本当に来ないよね、楽しいんだけどね。”

H “エレベータなくて外に出て来れない人がいる。誘いたいんだけど…”

J “スーパーのお彼岸の団子売り場で、団子を探している人に声をかけて…奥さん、どこに住んでいるの?、一

人だったら寂しいでしょ、お茶に来ない？とサロンに誘った。”

J “あそこでおしゃべりしている人は私が（サロンに）呼んだの。”